
血は水よりも濃い 銀魂

アクアマリン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

血は水よりも濃い 銀魂

【Zコード】

Z0430X

【作者名】

アクアマリン

【あらすじ】

夜鬼の娘・李杏は、複雑な感情に囚われた。

大切な妹・李茜の崩壊。幼馴染だつた神威の変貌。

「私は・・・・何故？」

何を恨めばいいのか。何を信すればいいのか。答えの無い問いの答えを、娘はただ追い求める。

「おねえちゃん、おとうさんとおかあさん、どうしたの？…ひんやりして、へいこしてられないよ。」

金髪をショートヘアにした妹の李茜が声をかけてきた。

「李茜…？」

そう叫いて李杏は妹を強く抱きしめた。

「おねえちゃん…？」

「いめんね。李茜…？」

肩が小刻みに震え、涙が出来になつたが、努めて涙は流さなかつた。

「おねえちゃん、何であやまつてるの？」

李杏は首を横に振ると李茜を離して言った。

「うう。何でもないよ。…ねえ、李茜…神威兄ちゃんのところ行きたい？」

李杏は心の底から行かない、と言つことを願つた。しかし、何故か李茜は神威になつていていたようだつた。

「うん、こきたい！」

李杏はそっか、と平気なふりをして言った。そして李茜の手を握り、空いた手に傘を持たせ、自身は灰色のマントを羽織り、傘をさした。

李杏はハッと顎を覚ました。

何故かずっと昔の、いや、ほんの数年前の夢を、何度も見る。

(・・私の運命が、変わってしまったからなの・・・?)

第七師団団長、神威。幼い頃は互いに馬鹿なことをし合つたものだ・・。

(神威・・・)

貴方はいつの間にかうなつてしまつたの・・?貴方は・・・何を
していたの・?

問いたい事は山ほどあった。

眠れない。この夢で起きてしまつて、こつもひつだった。

(李茜・・・・・・)

あの子は変わつてしまつた・・・。

両親から頼まれた妹を、私は、私は!—捺じ曲げさせてしまつた!—

あの子と共に生きるために、春雨に身を落した。

それ
が、

純粋なあの子を、捻じ曲げてしまつとは知らなくて・・・・・。

姉妹（前書き）

李杏^{りあん}：夜鬼の娘。両親が死去し、妹を守ることを約束した。黒髪を1つにまとめている。青い瞳。

李茜^{りせん}：夜鬼の少女。両親が死去し、姉に育てられた。金髪ボブ。青い瞳。

李杏は必死になつて神威を捜した。妹を生きさせたい。死んだ両親と交わした約束を胸に、ただただ、幼馴染を捜した。何とか探し出し、通されると、思いもよらず神威は大きな力を握っていることに気付かされた。

「神威・・」

李杏は李茜の手を一層強く握つた。変わつてしまつた幼馴染が笑みを浮かべて目の前にいる。

「この子は無害だよ。下がつて」

部下が下がると神威から李茜を守る事ができるのは李杏しかいないことに不安を覚えたが、それを顔に出さないよつにした。

「神威にいちやん！」

李茜が嬉しそうにそう言つた。李杏は小さい妹と田線をあわすと言つた。

「李茜、ちょっと神威兄ちゃんと話があるからや、ここに椅子に座つて待つてくれない？」

李茜は嫌だと言つてだだをこねたが、李杏が根気強く説得すると次々頷いて椅子に腰掛けた。

「久しぶりだね」

そう言つた幼馴染の腕を掴み、できるだけ李茜から離れる。

「分かつているのでしょうか？私が、何故ここに来たのか」

「覚えてくれていたみたいだね。昔のことなのに」

昔の事。彼が自身の父を殺そとし、返り討ちに遭つたのはいつのことだつただろうか。自らの家を去る直前に、神威は淡々とこれからのこと話をした。

「もし君が住む場所が必要になつたら、春雨においでよ」

そう言つた幼馴染の横顔が、今も瞼の裏に浮かぶ。

「その頃には、君を仲間にすることくらいなんでもないよ」になつてゐるからさ」

あの時は不吉な事言わないで、とつき返したのだが、結局こうなつてしまつた。

「忘れられるわけないじゃない。貴方がしたことを見たときは・

・鳥肌がたつたもの」

後からおねえちゃん、まだー?と李茜が焦れた様に聞いてくる声がした。それにあとちょっとだから、と答える。

「神威、お願ひ。私を、私を・・・・・

こんなこと、言いたくなかった。けれども、けれども私は一人じゃないのだ、と自分に言い聞かせる。そう、一人じゃない。李茜を、妹を守らなければならぬのだ。

「春雨に?」

言葉をつまらせた幼馴染の台詞を、神威が引き取つた。辛くて涙がこぼれそうになつたが、神威が目の前にいたし、何より妹の前で泣くわけにはいかなかつた。

「ええ・・

李杏は涙を抑えて顔をあげ、幼馴染の目をしつかり見据えて言つた。

「私を、春雨に入れて欲しいの」

力チリ、と耳元で鍵が閉まる音がした気がした。戻れないのだ。もう、過去に戻ることは出来ない。

少女は娘へ

田の前で肩を小さく震わせている幼馴染を見ながら、神威はしばし昔のことを考えた。

「おねえちゃんつたらー」

今よりももつと小さい李茜が、そう言っていた。黒髪の少女が、小さな妹と田線を合わせて微笑みを浮かべる。

「李茜も李茜でしょ、う？」

そう言つてフフッと楽しげに笑うと、幼馴染は神威に気付いた。

「神威。どうしたの？」

こちらに優しく微笑みかける幼馴染は、実際の年齢よりも少し大人びて見えた。

李杏。彼女と知り合つたのはいつのことだつただろ？ そんなことは覚えていないが、李茜が生まれたとき、ほんの数ヶ月前の李杏と比べると、少し大人になつていた気がする。

自分のしたこと、これからのこと話をすると、李杏の顔から血の気がすつと引いた。そして慎重に言葉を選びながら彼女は言った。

「神威・・貴方・・誰に歯向かつたのか・・・・・わかっているの・・？」

その瞳に恐怖が混ざつていたが、それよりもはるかに神威を案ずるかのような感情のほうが強く出ていた。神威が立ち去るつとすると、李杏は神威の背中に悲しげに呼びかけた。

「神威つ！・・貴方、神楽ちゃんのことも考えてあげてよ・・・・。あの子は・・。神楽ちゃんは、お父さんも口クに帰つてこないのに・・・貴方まで失つたら・・どう思うかわかっているの・・・？」

*

李杏はすっかり変貌した幼馴染を見つめていた。先ほどどじっか違つ。昔を思い出しているのかもしれない、と李杏は思った。

李杏は、ただ残された神楽が心配でたまらなかつた。けれども、いちばんいちばん生活が苦しくなつてきた頃だつたので、なかなか見に行く事は出来なかつた。

(神威・貴方は・・・)

神楽ちゃんに謝つてあげたの・・・? そう問いただしたかった。けれども、今の考え込んでいるような神威にそんなことを話しかけても恐らく無駄だらうということは分かつていた。

複雑だつた。今も、昔も。李杏が抱えている感情は。

*

李茜は遠くから姉と神威を見つめていた。先ほどから何も話せないで向かい合つていた。

(おねえちゃんは・・・)

おねえちゃんは、ずるい、と思った。神威にいちやんともつと話したかつたし、ずっとこのまま座つていたら暇なのだ。先ほどもおねえちゃん、まだー? と聞いてみたが、もう少しだからと粗手にされなかつた。

(あたしだつて、ちゃんとお話をきくのに)

今この胸に抱いている感情がどういったものなのかはわからない。けれども、それと同じような感情を姉が持つていたら・・・・・?

李茜の腹の底に黒い何かが疼いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0430x/>

血は水よりも濃い 銀魂

2011年10月9日15時54分発行